知床半島いかだ航海記

1980.7.29～8.9

北大ヒグマ研究グループ有志

〒060　札幌市北区北18条西9丁目　北大獣医学部繁殖学講座内

まずは今回このいかだ航海に挑んだ4人の男たちを紹介しよう。

大石知生　教養2年　21才

今回の航海を言いだした張本人である。とてもおおらかな心を持つ男ではあるが、クマ研の中でもきたなさにおいては天下一品で、磨けば光る玉もそのきたなさにかげをひそめている。彼の恋人とも言うべき愛犬カムイ・シリカをいつも連れている。

小沢真虎人　農学部3年　21才

長野出身で、長野県人特有の粘着さを持つ。いつも縁の下の力持ち的な存在で、今回の航海でもまとめ役の存在として光った。

松浦真一　教養2年　20才

とてもユーモラスな男で、ハーモニカや笛を奏でるのが大好きである。（一部には迷惑だという声もある。）高校時代はヨット部に所属していたとあって今回の航海では頼りになった。

坪田敏男　教養2年　19才

この航海記の執筆者。唯一の2年目で、ひたすら新鮮さをかもしだしていた。航海中はカメラマンを担当。

4人の性格などは文章中随所に出てくるので紹介はこのくらいにして本題に話を進めよう。話は1980年の北大の学祭も終わった初夏にさかのぼる。まず、この話をもち出したのは大石氏であった。彼は当時、前年にワンゲル部の人が同じように知床半島をゴムボートで航海したことを知っており、ぜひ自分もやってみようと思い立ったらしい。当時2年目だった小生に話がもちかけられたのは、エルムの緑がまぶしい6月のある日、小生を含めたクマ研の連中と春季調査の報告書の件で農学部の屋上で話し合っている時であった。大石氏より夏休みに知床をいかだで行ってみないかということで話をもちかけられ、その時はまったく現実味を帯びていなかったけど、何かとても雄大な話のような気がして、何気なく「ああやってみたい。」と答えたのだった。その時小沢氏も一緒にいて「おお、おもしろそうやな。」と乗り気だったみたいである。あとは高校時代ヨット部だったという松浦氏を誘ってみるということであった。

クマ研には昔から〝言いだしっぺ〟という言葉がある。つまり自分が何かをやりたいと主張するのである。そのかわりそいつが最後まですべて責任を持つ。これがクマ研の調査を含めたすべての活動の原動力である。この4人が今回の知床いかだ航海の言いだしっぺである。

それからというもの、酒を飲む毎に、あるいは顔を会わした時に話はもち出された。そんな中からまったく現実味を帯びていなかったものが、しだいに現実味を帯びてくる。最初は、前年ワンゲル部の人がやったようにゴムボートでやるつもりだったのが、ゴムボートが手に入らないということで、思案したあげくタイヤのゴムチューブを組み合わせていかだを組むことにした。コースは知床半島の宇登呂側のテッパンベツ川から岬までということに決定した。

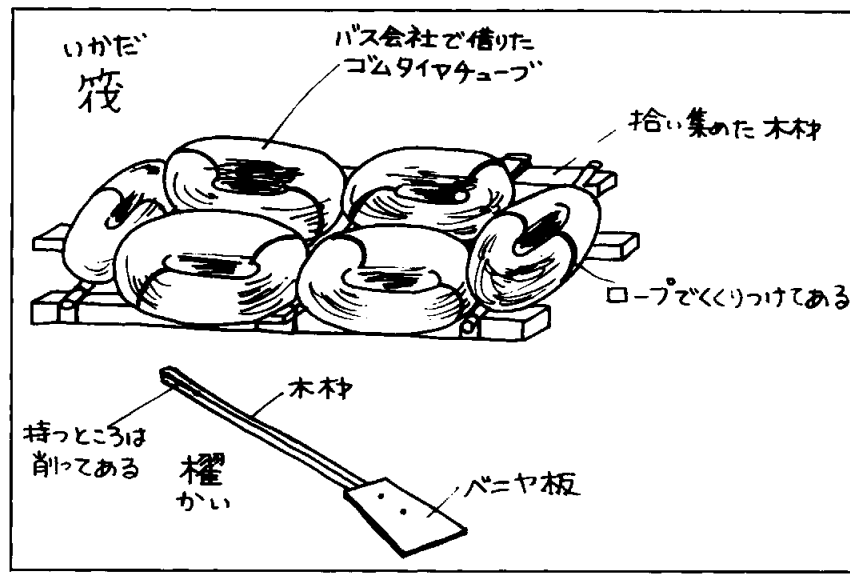
学生にとっては地獄とも言うべき試験週間も終わり、いよいよ夏休みに入って実際の準備が始まった。まず肝心のタイヤのゴムチューブはどうするかということが問題になった。一度タイヤのゴムチューブを使っていかだ下りをやったというクマ研の仲間である野口氏から、バス会社に行けば中古のチューブを貸してくれるはずだということを聞き、さっそく某バス会社に出向いていったところ、親切にもすぐに貸してくれた。これであとは木材を集めればいかだを組むことができる。ワンゲルの部室に行って前年にゴムボートで航海した人の計画書もみせてもらったりした。当時小生

は2年目で他の3人より試験が多かったので、この辺は一早く暇になった他の3人、中でもドッペリ（留年）学生である大石・松浦の両人が主に担当してくれた。

あとは装備と食料計画である。装備の方は、山の装備はクマ研の調査などでよく知っていた我々なのでそっちの方は大丈夫であったが、不安なのは海に必要な道具である。もしものことを考えてアンカーや長いロープなども必要だろうということで、これも用意した。救命衣は絶対に必要だという松浦氏の強い意見で買ってもっていったのであるが、当地では救命衣というより防寒衣の役割の方が強かったような気がする。大石氏の提案で趣味と実益のために釣り具をもっていこうということになった。それと、4人の一致した意見で花火を持っていくことにした。以前からクマ研では定評のあった中国製花火がいいということで、わざわざ北の方のデパートにまでくり出して買い入れてきたりした。このように着々と装備は整いつつあった。食料の方は、いつものことながら綿密な計画が立てられた。10日分の献立と非常食・行動食、それはバラエティーに富んだメニュー（決して豪華なものではない）が練られた。おそらく魚は現地調達できるだろうという見通しに立ってタンパク源は魚に頼ることにした。昼はいかだの上で食べることも考えられるのでパンやカンパンなど簡単に食えるものとし、当時クマ研ではやっていた麦こがし（別名ハッタイコ）もそのメニューに加えられた。普段から粗食に耐えることには慣らされていた我々なので食うことに関してはまったく心配はなかったといっていい。それと、何がなくてもこれだけは必要だといわれる酒は、量が一番少なくてすむウイスキーにしようというところまではよかったのであるが、とにかく安いのをということで店に並んでいたウイスキーの中で一番安いウイスキーを買って持っていったらそのまずいこと、まずいこと。最後の日まで残ったというのも珍しいことである。後になってなんであんなところでケチったのかと後悔したものであった。

そして、すべての準備が整ったところで、とにかく一度石狩浜で試しにやってみようということで、いよいよ実行に移ったのである。朝早くから大石氏の住居である逍遙館に集まり、そこらに落ちていたベニヤ板を拾ってきて適当な形に切り、それを細い木材に釘で打ちつけてカイをつくってみた。今から思えばその時作ったものは無茶苦茶貧弱なものだったような気がする。その作ったカイと適当な木材とゴムタイヤチューブを大石氏の愛車にのっけて、我々4人と先ほど紹介した野口氏と大石氏の愛犬カムイ・シリカを詰めこみ、さっそうと石狩浜にくり出したのである。ビキニ姿のまぶしいネエちゃんやカッコいいニイちゃんらでにぎわう石狩浜で、少し人目を避けていかだの製作にとりかかった。持ってきたゴムチューブに空気を入れ、6個を図のように組み合わせ、その下に木材を敷いてロープでくくりつけた。もちろん設計図など誰も作ろうとはせず、いき当たりばったりにただ組み合わせただけである。それでもまあなんとかかっこうがついたいかだができ上がった。そこで記念写真を一枚、ハイポーズ。

いかだを水につけて海パン一丁で4人が乗りこ



み、野口氏は砂浜で我々を見守ってくれた。カムイは水泳が大好きな犬で、我々が沖の方へ行こうとすると、途中までついてきた。しかしさすがに沖まで来るのはこわいらしく途中で引き返していった。何かかわいそうな気もする。シリカの方は水がまったくきらいとみえて、足を海につけては波に打たれてびっくりして砂浜にかけ上がってはまた同じことをくり返していた。大石氏は笑いながら「カムイだけなら知床に連れていけるけどなあ。」などとつぶやいている。さて、カイを使って漕いでみる。1・2、1・2、のかけ声で4人で漕いでみると結構進むではないか、などと呑気なことをいっている我々に対して、砂浜では野口氏が時計をみながら時速まで計ってくれていたのである。練習を終えて浜にもどってくると、「○m進むのに×秒かかっているから大体時速は△kmだった。」とアドバイスしてくれた。まったく親切な人である。それに比べて我々ときたら……。まあとにかく何とかいけるぞという実感を感じつつ、夕暮れのせまる石狩浜をあとにしたのである。

7月28日

〝いよいよ明日、知床の荒波に向かって出発である。思いっきりやるぞー。〟

ということで、いよいよ本番の日を迎えたのである。

7月29日

22：00札幌駅北口集合。集まった4人の様はというと、25kgくらいのザックにタイヤチューブをくくりつけたり、カイを横に立てたり、でかいなべをぶら下げたり、背負子にダンボール箱を積み上げたり、まるで山に行くのか海に行くのかわからないといったいでたちであった。斜里までの切符を買い、22：15発急行大雪に飛び乗り、1ボックスを占有して一息つく。そこでまずはビールで乾盃！これから始まる旅がどんなものになるのか、まったく見当がつかないといった感じではあったが、何か胸をつまらすものがあったのは小生だけではなかっただろう。

7月30日

何度目かのうつらうつらの眠りから醒めると北見駅に着いた。そこで汽車を乗り換え網走まで走る。網走駅で 210円也の月見ソバを軽く食い、急行大雪に乗る。えらく混んでいたので斜里までずっと立ちっぱなしであった。斜里駅に降り立つと、当時クマ研の大先輩であった山本　牧氏が出迎えてくれていた。牧氏はちょうどその時、知床の調査に来ていたのである。そこからすぐに小沢氏と小生はバスで知床五湖に向かう。大石・松浦は、あまりにも危険すぎると主張する牧氏との談判のため斜里に残る。我々2人は知床五湖のバス待合所で、レストハウスの人から石油2ℓ を 300円でゆずってもらい、そこでしばらく待っていた。ここでポリタンを1つ落としてきたことに気づく。そんな我々の前に現れたのは、大石・松浦の両名ではなく牧氏であった。計画を少し延期せよとのこと。その理由は言わずもがな我々の準備不足であった。そしてこれからやることとして、終了報告をどうするかを決めること、流された場合の連絡法、流された場合の食料計画、潮流の聞き込み、などを指摘された。そこで、一日斜里で停滞することにした。その間に、クマ研のＯＢでもあり知床博物館の学芸員をしておられる中川氏のところにあいさつに行き、航海が終了した時の報告場所になってもらうことを頼んだ。また、斜里の漁業組合を訪ねて、潮流のことをうかがったところ沖に出さえしなければまず流されることはないだろうという話を聞き、この一言ですべてが片付いたのであった。

〝一度は牧氏に引き止められ、我々のまったくの準備不足が暴露されたが、そこはなんとか臨機応変のきく我々、とにかく意志だけは固いものである〟

7月31日　○

そして迎えた7月31日、快晴の中9：20、我々は斜里をあとにした。10：20宇登呂着。アンノンネエちゃんでにぎわう宇登呂の町を尻目に知床大橋に向かう。11：45知床大橋着。観光客はここまでしかこないのでここから先は歩くしかない。知床大橋から知床林道を行こうとすると、営林署の人にどこに行くんだと引き止められる。あれこれと説明はしてみたもののまったく理解してくれず、そんなしゃもじみたいなもの（カイのこと）で知床の海をいけるか、まったく危険すぎるなどと散々なことを言われたが、強引に行くことにする。

少し進んだところで、スイカ持ちジャンケンをやろうという話がもちだされた。10分毎にジャンケンをやり負けたものがスイカを運ぶことにする。その結果、大石7回、松浦・小沢6回、坪田2回とまあ小生はえらく楽をさせてもらったのである。当初の計画では3、4個持っていこうなどという話も出ていたのであるが、たった1個のスイカが荷物の中で一番重く感じられた。大石氏はより一層その気持ちが強かったであろう。途中何回も小休止を入れながら歩き続けた。背の荷が肩にくい込み極度に疲れはしたものの、前方にそびえる硫黄山や知床岳の雄壮な風景が目に映ってくれば、どこからともなく力が湧いてくるのは不思議である。そしてうれしいことに、硫黄山橋のあたりで番屋に向かうトラックが通りかかったので荷台に乗せてもらうことにする。この時ほど人の親切のありがたみを味わったことはなかった。そして、ポンプタ川を過ぎたあたりから我々の前に知床の海が広がり始めた。茫洋の海が我々を出迎えてくれたのである。ポンベツ川あたりまで乗せてもらい、そこから少し歩くと我々のいかだ航海の出発点であるテッパンベツ川に着いた。知床大橋から延々7時間もかけてやってきたのである。テッパンベツ川に着いた時はもうすでに日が暮れかかり始めていた。夜は、釣ってきたオショロコマでみそ汁をつくり、それを晩飯のおかずにした。が、持ってきた酒のまずかったことよ！

8月1日　●キのち①　風強し

朝　ライス・みそ汁

昼　カンパン

夕　ライス・みそ汁・オショロコマ塩焼き

気力余って朝4時に起床し、5時半には朝食を終え、すぐにいかだ作りに取りかかる。流木は数知れず落ちているのでいかだを組む板はすぐにそろえることができた。持ってきたタイヤチューブをふくらませ、板の上にのせ、あとはロープでくくりつける。カイは練習の時に作ったものとは別に、本番用に用意したものを持ってきた。営林署の人にはしゃもじといわれたが、我々としては仲々の力作だったと今でも思っている。そんな作業をしていると、番屋のおじさんがやってきて花咲ガニを3匹さし入れてくれた。塩ゆでにして食ってみると、そのうまかったこと、うまかったこと。どうも御馳走様でした。昼すぎには、順調にいかだは出来上がった。練習の時のものと比べると格段にすばらしいものができる。

13：00いかだを進水させる。最初は全体にシートをかぶせてカッコウをつけようとしたのであるが、シートをつけると抵抗が大きくなり進まなくさせることが後になってわかった。荷物が重すぎないかと心配したのであるが、力強く浮いてくれた。荷物は流されてはいけないのでしっかりとロープでいかだにくくりつけた。4人が乗り込みいざ出陣である。「さらばテッパンベツよ！」と勇ましく出発したまではよかったのであるが、この日は風が強く一時間くらい必死で漕いだのであるが、我々の意に反してまったくといっていいほど進まない。結局 100m くらい前進したところで引き返すことにする。「帰ってきたぞテッパンベツ」としまりのない話でした。皆疲れ果てて、いかだにくくりつけた荷をほどくこともせず、すぐにたき火をおこしてその横で昼寝をむさぼった。沈滞ムードが流れる。今夜は白鳥座がひときわきれいな夜である。

8月2日　◎のち①　風強し

朝　玉ネギ、ワカメ入りみそ汁、浅草のり、梅漬け

昼　ラーメン

夕　アブラコの刺身、オショロコマ塩焼き

朝からさえない天気だったので起床が遅れる。9：50に朝食をとり、協議の結果今日は停滞することにする。本日の4人の行動を追ってみると

松浦　昼寝、ハーモニカ吹き

坪田　昼寝

小沢　昼寝、オショロコマ釣り

大石　海釣り、オショロコマ釣り、そして海釣り

大石氏がアブラコを5匹も釣り、それを刺身にして食べてみる。とても美味！（後で番屋の人に、この時期は刺身では食べない方がよいと言われた。）小生は釘を踏んづけて痛くてびっこをひく始末。（札幌に帰ってきてから病院に行ったところ3cmも深く刺さっていた。）大石氏は〝ものもらい〟で目がお岩さんのように腫れてきた。小沢氏は風邪をひいたと言っている。何か暗澹たる気持ちになるが、ここで釣りをしながら停滞しているのもまた一興なりといったところか。

8月3日　●キのち◎　風なし
朝　スパゲティ
昼　麦こがし
夕　ホッケ、雑炊

昨日に続き、朝から霧雨が降りさえない天気だったので、何となく時間を過ごしてしまい、結局9：00に出発することになった。今日は、一度荷物なしでどれくらい進めるものかを試しにやってみることにする。結果如何では今回の航海を断念せざるを得ないことだって有り得る。最初にはつけたシートもはずし、まったく裸のいかだを4人で漕いでみると、進んだ、進んだ。時速2kmくらいか、快調に進むではないか。松浦氏などは、「この分でいけば今日中に岬まで行けるんじゃないか。」と言ったくらい、少し極単な話ではあるが、そのくらい前に比べたらその速さはみごとなものだった。ある地点まで進みいかだを残し、荷物を取りにテッパンベツまで陸をもどっていくことにする。小生は足を負傷していたのでいかだとともにそこに居残った。どうも御苦労様です。荷物も運んで結局今日は予定していたタキノ川を超えて、タコ岩の手前の番屋の横に幕営することにする。3日かかってやっと前に進める目度が立ったのは何よりも大きな収穫である。その上何と、タコ岩の番屋のおじさんが親切な人で、ホッケを御馳走になった上御右衛門風呂にも入れてもらい、この時ほど安堵感というものを感じたことはなかった。4人で沈む夕日を背にして飯を食い酒を飲む心地といったら、何ものにもかえがたいものである。

8月4日　●キ一時◎
朝　アブラコ、ホッケ、ライス
昼　カンパン
夕　焼きソバ、ライス

朝、番屋の人のドラムカンを叩く音に起こされる。5：00である。番屋の人たちは毎朝こうして漁に出ていくらしい。我々がだらだらと朝飯の仕度をしている間に、おじさん達は漁からもどってきた。そして、朝からとれたてのサバとアブラコをいただき、塩焼きにして食う。まさに海の幸そのものである。その後しばらく番屋でくつろがせてもらう。我々の今回の航海の話やらクマの話やら大学での生活の話やら、いろいろと聞かれた。さぞかし我々が勉強嫌いの学生にみえたであろうと思う。こんなところに訪ねてくる人などめったにいないそうであるが、それでも年に1・2回は我々みたいな変な学生がやってきては話をしていくそうだ。だからおじさんの方もよく覚えていて、何年前にはどこどこの大学の学生がやってきただとか、何年前には海を泳いでいった奴がいただとか、こまごまと我々に話してくれた。我々もそのうちの一組に加わったようである。一人は水産学部を卒業したとかで、松浦氏にむかって、「水産生は一番バカみたいな顔をしているからすぐわかる。」などとからかったりしていた。10：00頃まで談にふけっていたのであるが、今日も進まないといけないのでそろそろおいとましようとしたところ、大事そうに壁に干してあったサケの燻製まで持っていけと我々に差し出してくれた。何とお礼を言ったらいいのかわからないといった気持ちで、「本当にどうもお世話になりました」とあいさつを済ませ、いかだ2日目の航海に出たのである。出発間際におじさんたちがやってきて、我々のいかだを見てそのりっ

ぱさにたいそう感心して、とくに我々の作ったカイをたいそうほめてくれた。また、「これはいいロープを使っている。」などと言ってくれたのだが、「このロープの方が丈夫だぞ。」と漁に使うロープを持ってきてくれた。本当にやさしい人たちばかりである。ここで、今まで固かった我々の自信を一段と固めさせてくれたのである。

11：00出航。お世話になったタコ岩の番屋をあとにして、少し行くとカシュニの滝に近づいた。切り立つ断崖から沢の水が滝となって海に流れ落ちている。秘境知床ならではの光景であろう。その上、そこは岩が入り組んでおり、今までの穏やかな波とは一変して、いかだがゆらゆらと揺れるほど波立っている場所である。ぜひこのカシュニの滝を写真に収めたいと思い、呑気にもカメラを出そうとしたところ、松浦氏が、「こんなところでそんなことしていられるか、早く漕げ！」といささか緊張した面もちで怒鳴った。今から思えばここが一番の難所だったようだ。そこもなんとか無事に通り過ぎ、再び穏やかな湾に入った。いかだはどんどん進んでいく。所々でカモメが営巣している岩に出会った。沖に出ることはなくほとんど岸に近いところを進むので、所々で定置網が張ってあり、それを乗り越えてはまた次の網のところまで行く、といったことを何回も繰り返した。昼食時には、この網のロープにいかだをくくりつけて、流されないようにしてとめた。そんなふうに進んでいく我々の姿を説明しておくと、ザックが大体一人分が20kgくらい、平均体重およそ65kgその他アンカーやスイカなどを合わせると全部でおよそ 350kgくらいの荷物を乗せ、後には途中で拾った特大の浮き玉をつないだいかだに、その上に乗る人間のカッコウはというと、足には地下足袋をはき、海パンの上にジャージーをはき、上はヤッケに救命衣、頭にはタオルを巻くといったものである。まさに〝クマ研山水泳部〟という言葉がぴったりといったカッコウである。下半身は常に海の中にあるので、夏とはいえども結構冷えてくる。海で泳ぐことなど一度もできなかった。それで、1・2、1・2、と息を合わせてカイを漕いで進むのである。時に2人づつ交代で漕いだりもしたが、ほとんど4人でずっと漕ぎ続けた。同じ場所でずっと漕いでいると片方の腕ばかり疲れるので、時々場所を交代したりした。大石氏は時々海に糸をたれて魚を釣ろうとするが、こんな奴らにひっかかるバカな魚などいやしない。しかし気分は最高といった感じである。結局今日は6時間漕いで17：00にオキチウシに到着。ここで幕営することにする。近くにあった番屋にあいさつに行く。夜になってシトシトというよりサーサーと霧雨が降り出す。安物のテントを持ってきたので、中まで水がしみ通りシュラフはびしょびしょになってろくろく眠れなかった。

8月5日 ●キ
朝　ソーメン
昼　カンパン
夕　すり身のみそ汁・ライス

朝から風雨強く終日降り続く。今日は停滞にする。朝は番屋の人に呼んでもらいしばらく番屋でくつろがしてもらう。その後盛大なたき火をたき、その回りでただぼんやりと時を過ごす。今回の航海を通じてラッキーだったことは、どこに行っても流木が豊富にあり、たき木にはまったく困らなかったことである。たき火というものはとても不思議なもので、一日中その横でながめていても決して飽きないものである。こんなところでは、考えにふけることができそうなものであるが、実際には何も考えていなかったような気がする。時々お湯を沸かしてはコーヒーやお茶を飲んだ。今回調法したものの一つにこのお湯を沸かすものがあった。それはただのビール缶である。2ℓ入りの大きなやつで、これをたき火の中に置いておけばすぐにお湯が沸き、とても便利なものだった。夜になっても雨は止まず、益々風が激しくなる。大石氏は岩陰に丁度いい寝場所を見つけたらしく、そこで一日中寝ていた。自分では〝岩窟王〟になったつもりらしい。他の3人は昨日に続き、びしょびしょになりながらテントで寝る。

8月6日 ●キ
朝　麦こがし
昼　麦こがし
夜　オショロコマ塩焼き、シチュー、ライス

シュラフはびしょびしょになり、背中にはでっ張った岩が当たり、とても寝ていられないので、一人起きて番屋に行くことにする。あとの二人はぐっすりと眠っておられる。外はまだ激しく雨が

降っている。7：30頃小沢氏が起きてきたので呼びにいくがたき火の番をするとのこと。雨に濡れてまで外にいることはないと思うのであるが、小沢氏は外にいるとのこと。小生の考えが甘いのか、小沢氏が厳しすぎるのかはわからないが、少しオーバーではあるが、人間の生き方の違いを見たような気がした。番屋で一人ぼんやりと考えてみたのであるが、今回の旅、4人でやっているのだけど、実際には一人一人それぞれがそれぞれの旅をしているような気がする。大石氏にしたって松浦氏にしたって小沢氏にしたって、そして小生にしたってそれぞれが自分の旅をしているような気がする。

それにしてもうっとうしい天気である。おてんと様、早く顔を出してくれ！と祈る気持である。その意が通じたのか、15：00頃になってようやく雨も上がり空が明るくなり始めた。さっそく大石氏と小沢氏はいわな釣りに出かけていった。30分くらいで13、4匹のオショロコマを釣ってきた。中には20cm級のものもいた。この日の晩飯は主に小生が作ったのであるが、失敗して飯をこがしてしまった。しかし皆文句も言わず全部平らげてくれた。まさに〝有れば食う〟の法則に従うクマ研ではあるが、みんな結婚したらいいダンナになるだろうななどと想像したりする。小生はテントではとても今日も寝れそうにないので、番屋に泊まらせてもらうことにする。大石氏は昨日に続き岩窟王になる。小沢・松浦はテントで寝る。皆、明日の航海を確信して寝床に入ったことであろう。

8月7日　◎
朝　ライス、みそ汁
昼　大カンパン2袋、ソーセージ、レモン
夜　マーボ豆腐

小生はいつもになく快適な朝を迎え、5：00に起きる。あまり天気はよくないが雨は止んでいる。6：00には皆起き出し、すぐに朝食をとり、9：13出航。長く停滞したオキチウシをあとにする。順風に乗り快調に進む。11：00頃アウンモイの次の沢名づけてウニの沢でいかだを岸につけて昼食をとる。そこは沢といっても海に流れ込むところで、切り立つ両岸にかこまれた湖みたいな所である。とても神秘的な感じがした。そこで魚釣りとウニとりを楽しむ。ウニとりに夢中になっていた我々を愕然とさせる事が起こった。何と人間に出会ったのである。登山靴をはき、オーバーズボンとヤッケで身を固めた三人の徒歩パーティである。三人は我々に軽くあいさつをし、たんたんと我々の前を通り過ぎていった。我々はただぼう然とその後姿を見送った。

そこを離れて、16：30獅子岩に到着する。今日はここに幕営。ここの番屋はすでにとり壊されていて、その跡だけが残っていた。あたりには生活道具が散在していたのであるが、小沢氏などはここで拾った作業ズボンを今でも愛用している。晩飯を食った後、例のスイカを食べようということになり二つに割ってみると、なんと中身が腐っているではないか。あれだけ苦労して持ってきたのにと、皆一同ガックリ。しかし、もうゴールは目前にせまり、夜は久しぶりに安心して眠れた。

8月8日　①
朝　もち
昼　冷や麦
夕　釜飯、ガヤ汁（みそ味としょう油味）

いよいよ航海最後の日である。長かったようで短かった10日間。最後を飾るのにふさわしく青空が広がる好天気である。朝7：00に小生が起きてみると大石氏は待望のガヤを釣っていた。10：00出航。沖合いには観光客を乗せた遊覧船が走っている。何だかみんなが我々を見ているようで気恥ずかしい気がする。我々のいかだは順風に乗ってどんどん進む。あまりにいい風が吹いているので、これは帆をはって進むしかないと思ったのであるが、帆になるものといえば、小生が持ってきたポンチョくらいしかなかったのでそれをカイの先にくくりつけ立ててみた。するとうまい具合いに風を受けて張ってくれた。快調、快調。全速前進!!右手に、クマ研で第三岩峰と呼んでいる岩場が見えてくる。もしかしてクマが見れるのではないかと思い目を凝らしてみるが、そうはうまくいかない。そうこうしているうちに、12：30最終的な目的地であるワシ岩に着く。9日間かかってやっとたどり着いたのである。あとは岬の燈台まで散歩に行ったり、釣りをしたりしてくつろぐ。夜には交代でドラムカン風呂に入り、その横で花火をして楽しんだ。今日は皆外で寝ることにする。たき火を囲んでぐっすりと眠る。

8月9日 ◎

7：00起床。朝飯を食い各自の荷物をパッキングした後、10日間我々の航海のためにはたらいてくれたいかだを組みはずし、燃やすことにした。何かしら感慨がこみ上げてくる。カイは大石氏が1本、松浦氏が2本持って帰ることにし、残りは燃やす。小生は途中で拾った特大浮き玉を2つザックの横にくくりつけ持って帰ることにする。早く出よう出ようと言いながら結局11：00頃ワシ岩を去る。文吉湾に12：00頃着き、13：00の集荷船に乗せてもらう。さすがに集荷船は速いもので、我々が1日かかった獅子岩からオキチウシの間をたった30分で通り過ぎた。点々と並ぶ番屋で獲れた魚を積みながら一つ一つ過ぎていく。タコ岩のおじさんにもう一度会えるかなと期待したが、残念ながらタコ岩の番屋には止まらなかった。宇登呂に着く手前で、羅臼岳のところだけが晴れ間を見せ、その山容を望むことができた。16：00頃宇登呂着。再びアンノンネエちゃんらでにぎわう宇登呂の町をねり歩く。そこから斜里行きのバスに乗る。車中は我々と夏休みにどこかかしこから集まった観光客でぎっしり埋まった。我々を乗せたバスは斜里に向かって走り出した。

知床半島いかだ航海記　完

追　記

その後、小生は斜里で他の3人とたもとを分かち、網走に立ち寄り、クマ研の夏の調査に参加するために天塩に向かった。網走では、民宿に泊まったのであるが、小生が網走の街をあまりに目立つ姿（浮き玉2つが目立ったようだ）で歩いていたので、その民宿のおじさんに完全に顔を覚えられ、今では網走に行けばただでそこに泊まらせてもらえるほど仲よくなってしまった。今でも特大浮き玉は、小生の勉強机の上にぶらさがっている。

他3名は、斜里の北方文化研究室に立ち寄り、知床の調査にやってきていた人たちと歓談した後札幌に向かって汽車に乗りこんだ。大石・松浦の両名は持って帰るはずだったカイを車中に忘れてきたそうだ。

最後に今回のいかだ航海でお世話になった方々を紹介する。タイヤのゴムチューブを貸していただいた中央バス会社、一日斜里で泊めていただいた北方文化研究室、斜里の知床博物館の学芸員であられる中川　元氏、斜里第1漁業協同組合の方々、タコ岩、オキチウシの番屋のおじさん達、ウトロの漁船、いろいろとアドバイスしてくれた野口重一氏、ワンゲル部の佐藤　創氏、山本　牧氏をはじめとする北大ヒグマ研究グループの同兄等本当にたくさんの人々のお世話になり、4人供々心から感謝の念に耐えない気持ちである。最後まで無事やり遂げられた事は本当にすばらしいことであるが、小生としてはそれよりもこれだけの事ができる人間に出会えたことを幸せに思っている。

知床半島いかだ航海記　完結